

物語』に通じるものがあり、詳しいが、その後の記述は極めて簡略である。

(注一)『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』(平成二年二月)

(注二)生形貴重氏は「延慶本『平家物語』と冥界——龍神の侵犯と世界の回復・大將軍移行の構想——」(『日本文学』昭和六二年四月)の中で、「末法の世に王権を補弼し、王法・仏法を再興する『大將軍』の登場を語るという構想」にその理由を見て居られるようである。

(注三)引用文は、特に理っていない時、延慶本(非当道系本の代表としても。猶、当道系本のそれは屋代本)を用いている。

(注四)『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』(昭和五七年二月)

(注五)山下宏明氏「源平闘諍録管見——其の成立基盤をめぐって——」(『國語と國文學』昭和三六年八月)の「源氏拳兵の動きを特に東国の側から把えようとする」という基本的な指摘を踏まえるものである。

(注六)尾崎勇氏は「延慶本『平家物語』における頼朝の造型」(『國文學論叢』昭和六三年三月)の中で、「三月」を「東国の首領」、「三年」を「將軍院宣」と考えられた。後者については異論がないが、前者については見解を異にする。

(注七)猶、延慶本・長門本では「第一本」の「土佐房昌春之事」で「院ノ、宣并高倉宮令旨」を得て旗揚げしたことが記されていた。

(法八)広瀬和枝氏は「延慶本平家物語における文覚伊豆配流・福原院宣説話の形成に関する一試論」(『軍記と語り物』昭和五五年三月)の中で「尾張国知多半島の内海で鎌田兵衛正清と共に代々の家人長田庄司忠致のために湯殿で殺された義朝のことがふまえられている」と見られた。

(注九)延慶本には「同院宣異本云」として後者のものも収載されている。

語句を入れている。更に延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本になると、頼朝は「院ノカクテ渡ラセ給事ヲハ承リ歎」(延慶本)いて申し出た事に成つて居り、又、文覚は「とうこくの大名小名一人もしたかはぬものはよも候はし」(長門本)と保証する(四部合戦状本では頼朝の言葉)。前者についてはこのように具体的なこと(「歎テ」)など記されていないが、後者については「大將軍ノ相」以上のものはない(長門本・源平盛衰記では令旨の施行状について「勇士等皆兵衛佐の下知にしたかひければそむくもの一人もなかりけり」(長門本)ということが記されているが、時間上は院宣拝受以後になつて居る様である)。ということは、文覚が光能や法皇の心を動かすように取り繕つて頼朝を紹介しているということであろう。文覚から頼朝への院宣を頼み込まれた光能は、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本では「平家ヲハヤスク滅シテ逆鱗ヲモ休奉リ人々ノ歎ヲモシツメテム」という言葉に心動かされて「イカサマニモ隙ヲ伺テ御氣色ヲ取ヘシ」と思い立つ。一方、南都本や当道系本の光能は、状況に悲観的で、力なさそうであるが、「是モ天照大神ノ御勸ニテモヤ有覽」(屋代本)と思ひ直したり、ともかく取り次いではみようという態度であつたり、再度文覚に説得されたりと区々ながら、文覚の紹介を取り次ぐことになる。院宣は、延慶本・長門本では数日かかつて下される(長門本では法皇が頼朝の成否を占い、瑞相を得たので下すとなつて居る)が、他本ではほぼ即座に許された風である。院宣は光能から文覚に渡され、文覚はこれを「頸ニ懸テ」頼朝の許へ向かう。一方、南都本や当道系本では、この間、頼朝

が「愁ナル事ヲ云出テ頼朝何ナル目ニカアハンスラント思ハシコトナウ案シツ、ケテ」いたと描く。これらの諸本は頼朝の心理を描き加えるのである。院宣を手にした頼朝は「手洗口嚙テ」から披見する(源平盛衰記では、文覚が頼朝に神護寺への十三箇所の寄進状を書かせてから渡すことになつていて、文覚の擬装、抜け目のなさを詳述する)。院宣は延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本と四部合戦状本や当道系本とは異なる。前者では、清盛を「仏神ノ怨敵」「王法ノ朝敵」と指弾し、頼朝に追討を命ずる内容である。後者、四部合戦状本や当道系本の方は「神道ノ冥助」を挙げて、頼朝を励ますような色彩が強い。院宣を得ることによつて、『平家物語』では頼朝が反平家勢力の中心人物の地位に据えられたのである。院宣を得た頼朝は延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本では八幡大菩薩、伊豆・箱根両所権現に願を立てて、思い立つことになつて居る。これらのうち、延慶本・長門本では、文覚に対して韜晦した時、心中、この三柱の神に「多年ノ宿望ヲ遂テ且ハ君臣ノ御鬱ヲ休メ奉リ且ハ亡夫力素懷ヲ遂ム」と祈願していたので、「神力」を得て、その願いの第一歩が叶えられたということなのかもしれない。

猶、真名本『曾我物語』では、文覚が北条館の頼朝を尋ね、「平家世成末見 小松内府コソ計モ賢心モ豪御シ 先立失玉メ」と述べ、頼朝に「高運相」があると言つて、「諍世」を勧め、思い立つならば院宣を貰つて来ると申し入れる。頼朝は喜んで約束し、文覚は光能を介して院宣を手に入れ、頼朝に届けることになつて居る。文覚の「諍世」を勧める言葉には『平家

し出す文覚の言動に課された役割は頼朝の警戒心を解くことである。この役割に当たって四部合戦状本、南都本や当道系本では、文覚が「此廿余年不離身持アリヒテ奉行ハ今ハ一劫モ輕給ヌラン」（屋代本）と述べて、「奉公ノ者」（屋代本）であることを訴えることを訴えることになっている（延慶本・長門本にも同趣旨のことは含まれている）。これに対して、延慶本・長門本・源平盛衰記では「世ヲ取人ヲ且越ニシテ本意ヲ遂ト思シ志」が頼朝に首を渡すことよって叶えられたことを説くのが中心になっている。それは頼朝への尋常ならざる期待感とでも言えようか。神護寺復興は文覚の勧進から頼朝の行動へと手渡されたのである。同時に、その中で、頼朝の「世ヲ取人」であることが、義朝の首が目出度く頼朝に渡されたことによつて証されてもいるのである。延慶本・長門本・源平盛衰記の首渡しの場面は単なる頼朝の警戒心を解く為の言動に止っていない。首が渡されること自体が「世ヲ取人」であることの靈瑞として、頼朝を動かすのに違くない。

話を『平家物語』に戻せば、延慶本・長門本では後日（他本では前の場面に続いて、同じ時）、文覚に対して頼朝は勅勘を免してもらわなければ「何事モ思立ヘクモナシ」と訴え、三島大社への「一千日ノ日指」の満願の夜の夢を語る。但し、頼朝の夢をここに記すのは延慶本・長門本だけである。延慶本は重盛死去の処に同一の夢を描き、源平盛衰記や当道系本は重盛死去の処にだけこの夢があり、一方、長門本はここにしかない。延慶本によれば、頼朝がこの靈夢を得たのは治承三年三月三日の頃と考えられる。と

すれば、頼朝が三島社へ「一千日ノ日指」を始めたのは安元三年正月の頃ということになるか。安元三年正月といえば、二十四日の除目で重盛が左大将に、宗盛が右大将に並び、平家一門の全盛が現出した頃である。ところで、「一千日」という日数は第一節に出て来た「近ハ三月遠ハ三年」という表現の「三年」と殆んど変わらない。しかし、第一節の場合は「征夷將軍トシテ天下ヲ治メ給ヘシ」ということに関わつての年月であり、この平家追討の院宣を貰つて、頼朝の親の仇討ちが公的に許されるといった意味相とは微妙にずれる。その意味では二種類の靈夢を載せている延慶本は複雑で、源平盛衰記（頼朝に対するものと、重盛に対するものに書き分けている）、長門本、当道系本の方がすっきりしている。勅勘のことについては別稿で触れた。結論を繰り返せば、延慶本・長門本・源平盛衰記では既に以仁王の令旨の施行状を發するという行動を起こしていたので、そのことと矛盾した言葉ということになる（以仁王の死を踏まえた、策略的な言い方という受け取り方もあろうか）。これに対して、令旨が届いたことを伝えるだけで、全く頼朝の反応を記していない四部合戦状本や当道系本では、特にそのような矛盾は感じられない。

さて、「イカ、シテ勅勘ヲユリ候ヘキ」と相談を受けた文覚は、自ら京に上り、縁者の藤原光能に相談する。文覚の言葉は、中院本や八坂本では「よりともこそちよくかんをだにゆるされてるんぜんをだに給はるものならばむほんををこして平家をほろぼさん」（中院本）ということだけであるが、他の多くの当道系本や南都本は「八ヶ国ノ家人共ヲ催テ」（屋代本）という

盛衰記に近い。

以上の、文覚が頼朝を説得して「謀叛」を決意させるところでは、第一節で論じたことに関わるものが多い。まず、頼朝が征夷大將軍になることが、「日本國ノ主」という表現まで同義と見れば、全ての『平家物語』に見られる。第一節ではこれは景能の夢解きという形で具体的に示されたのだが、ここでは文覚の観相の言葉として告げられている。このことに関わって、延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本では、文覚自身が「究竟ノ相人」と強調したり、予め「日出相人」という話を流したりしている。延慶本・源平盛衰記の場合、既に景能の夢解きもあつた訳だから、文覚の観相による説得で「謀叛」を決意しても宜さそうに見える。しかし、そう単純に事が運ばないのは頼朝の文覚に対する強い警戒心があるからである。この警戒心は全ての『平家物語』に描かれているが、延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本では頼朝の心内語という形で特に具体的に表明されている。又、延慶本・長門本では二人の初会の時に文覚の方が「憶持アルコソヨケレ」と戒めていて、警戒心の賞揚といった傾向さえ窺える。^(注八)警戒する頼朝は人物の相貌を帯びていることになるのかも知れない。この演技する頼朝を強調する為に、延慶本・長門本は更に文覚の勧めを拒む一方で、心中密かに八幡大菩薩、伊豆・箱根両所権現に祈願していたとする（四部合戦状本の場合は、頼朝の拒否が本心ではないことを示すことになっている）。第一節の伊東からの脱出行の時は祈願の対象は八幡大菩薩に対してだけであつた。今回も八幡大菩薩に対してだけとするのは四部合戦状本のみで、延慶

本・長門本は「当国」の神「伊豆宮根両所権現」を加えている。祈願の内容「多年ノ宿望ヲ遂テ且ハ君臣ノ御辭ヲ休メ奉リ且ハ亡夫カ素懷ヲ遂ケム」というのは、延慶本においては文覚の言葉の順序を替えて「君臣ノ御辭」の方を先にもつて来たものとなっている。これに対し、長門本や四部合戦状本では、頼朝の心中の文字通りの「多年のしゆくほう」（長門本）ということになるのであろう。長門本の場合（四部合戦状本は不明）、「君臣のいきとをりをやすめ」というのは、第二節で扱った以仁王の令旨を受けてということになるのであろうか。延慶本のように文覚が「父祖ノ恥ヲモ雪メ君ノ御辭ヲモ休奉り給へ」と言つて勧めるものに源平盛衰記・両足院本がある。これらに出て来る「父祖ノ恥ヲモ雪メ」ということは、第一節でも第二節でもこのように直接的に記されることはなかった。従つて、これはこの第三節の逸話の特徴的な内容と言えよう。この頼朝の「父祖ノ恥ヲモ雪メ」といふ情念を義朝の首の場面にまで直接的に投影させるのは延慶本・長門本・源平盛衰記の三本である。延慶本・長門本の場合は頼朝が、文覚が帰つた後、父の首に誓うという形で直接的に描かれていく。一方、源平盛衰記では文覚の「とく／＼平家を打亡して後 且は父のほたいの為且は文学か本意のことく大願をはたし給へ」といふ言葉を受けて、「謀叛」に向かつて動き出すことになっている。文覚が頼朝に義朝の首を差し出すところには、外ならぬ父の首なので頼朝の「父祖ノ恥ヲモ雪メ」といふ情念が、基調として煽られているのではないかという気がする（延慶本・長門本は区別しようとしているが）。しかし、文脈上、義朝の首を差

都本では覺文房に教えられて覚悟して座についている頼朝を文覚は周知のように誠に奇怪な態度をして種々に睨む。その後、頼朝の前に出て、「歳のかさなるとして以外にくまみ給けり」と言つて泣いた後、態度を改めて「心操穩して威應の相おはず 是は人の思付相也」と述べて、「後たのもしき人」と褒める。頼朝は人聞きを恐れて、その日はそのまま帰る。南都本は、この間を文覚が「ハタトニラ」むと単純に描き、頼朝が身構える部分で脱文となる。源平盛衰記は日を替えてこの後を描くが、南都本は日を替えず、頼朝の出家を諫めた後、次ぎの部分に這入つて行く。源平盛衰記によれば、先の事を契機に頼朝と文覚は互いに行き来するようになった。そして、すっかり親しくなつた或る日、文覚は、清盛が「悪逆無道にして宿運既に尽たり」と述べ（南都本は先述のように、頼朝を諫めた後、「平家ステニ運命末に成テ」とだけ、この間を記す）、頼朝は「大果報の後たのもしき人」だから「とくく謀叛を發し平家を打亡して父の恥をも雪國の主となり給へ」と勧める（南都本は「平家を打亡して父の恥をも雪」が「世ヲ鎮メテ」となっている）。文覚の勧めは延慶本・長門本のものに近いが、源平盛衰記には「小松殿二次テ」という表現がなく、清盛から頼朝に直接という風である（南都本は「小松殿ニ繼テハ御邊ノ大果報ノ人」という表現で、器量・宿運に限定している。従つて、現実的「日本國ノ主」は清盛から頼朝にとつて、その点では源平盛衰記に一致する）。文覚に「謀叛」を勧められても頼朝は警戒してその気のないことを述べる（延慶本・長門本のような心中の思いを記さない）。すると、文覚は義朝の首というものを取

り出す。源平盛記では「平家を打亡して後且は父のほたいの爲且は文学か本意のことく大願をはたし給へ」と勧めるためだが、南都本は「奉公アル者」で警戒する必要がないことを証明するのが主と読める。源平盛衰記も南都本もそのまま日を改めずに「勅勘」の件に続いて行くので、延慶本・長門本にあつたような頼朝の契いはない。

当道系本では、頼朝の居所「伊豆ノ御山」が近いので、文覚の方がそこを訪ねて「ナクサ」んでいたと記す。或る時、文覚が「心モ甲ニ謀モ勝レテ」いた重盛が死んだので、「將軍ノ相」をもっているのは頼朝しかいないと言ひ出す。そして、「世ヲ鎮メ天下ノ主ト成リ給へ」と蹶起を促す。頼朝がその意のない旨を答えると、文覚は頼朝に「志ノ候程」を見せると言つて、義朝の首というものを差し出す。頼朝は確信できなかったが、それを契機に文覚への警戒心を解いた。猶、当道系本には、「謀叛」の目的を「法皇ノイツトナフ福原ノ籠ノ御所ニ被押籠渡セ給フ御憤ヲモ休メ奉リ父ノ會稽ヲモ雪メ給ヘカシ」とする両足院本や頼朝の韜晦振りを「もとよりしりよふかき人にておはしければ」と明かす中院本など小異がなくはない。又、四部合戦状本も、当道系本と同じく文覚が頼朝の許へ「謎寄」つていたという処から始めるが、以下の表現は寧ろ他の非当道系本に近い。まず、文覚の「謀叛」を勧める言葉は、宗盛に言及する点で延慶本・長門本に近い。次の頼朝の文覚を警戒した言動は、頼朝の心中を描いている処を始めとして表現まで延慶本に一致している。最後の文覚が義朝の首というものを見せて頼朝を説得する条は、獄舎に繋がれている時に盗んだとする点で源平

る)。しかし、四部合戦状本も既に「有リ一院、宣并高倉宮令旨」という頼朝の宣言を伝えているのであるから、「一院、宣」の経緯については以下に記されるから良いが、「高倉宮令旨」の方が脱落している感は否めない（「年来宿意」が「高倉宮令旨」をさすとも言い難いのではないか。）

さて、次に、文覚が頼朝に「謀叛」を勧める場面に進もう。ここは、前二条と異なり、文覚と頼朝との間で演じられる劇の全体に目を通すことになる。延慶本・長門本は、文覚と頼朝の出会いから文覚を介して頼朝が後白河法皇の院宣を貰うまでを、後述のように日（会見）を重ねることによって漸層的に盛り上げて行く（源平盛衰記にも一部、日をかえた処がある）。この描き方は第一節における延慶本の「年来ノ宿意」のそれに一致する。四部合戦状本・南都本・当道系本は、これに対し、或る一日に纏めて描いている。但し、内容的には源平盛衰記・南都本が一組、当道系本が一組（四部合戦状本は個々の表現は非当道系本だが、全体の姿は当道系本に近い）ということになる。

延慶本・長門本の場合、頼朝と文覚との出会いは文覚の立てた湯屋に頼朝が遣つて来たことに始まる。請われて「湯ノ呪願」を行った後、文覚は頼朝の下人に頼朝が「相傳ノ主」であることを告げる。そして、名前が吉く、日本国の大將軍の相もあると言つて褒める。しかし、その一方で文覚が「人ハ憶持アルコソヨケレ」と戒めるので、下人は頼朝を促し、再会を約して帰って行く。一月程経つて頼朝を訪ねて来た文覚は、「小松殿二次テワ殿ソ日本國ノ主ト可成給人ニテオワシケル」と言つて、「謀叛」勧める。

重盛に次いでというのは、重盛は「謀モ賢ク心モ強」であつたが、「小國ニ相應セヌ人」で、清盛に先立ってしまったからである。文覚は頼朝に「高運ノ相」があることを強調し、「日本國ノ大將軍」になつて、「父祖ノ恥ヲモ雪メ君ノ御爵ヲモ休」めよと述べる。頼朝は心中、八幡大菩薩や伊豆・箱根両所権現に祈願し、「弘經義明已下ノ兵ニ契テ隙ヲ伺」おう（長門本には「弘經義明已下ノ兵ニ契テ」という具体的表現がない）と考えるが、表面的には文覚を警戒して、その意はないと拒否する。それから四五日して、文覚は義朝の首というものを持参し、「世ヲ取人ヲ且越ニシテ本意ヲ遂」ようと携えて来たと言ふ。頼朝は文覚の「マメヤカニ志ノ有ケル事」に感じ、「定テ此世一ノ事ニテハアラシ」と考へて、その後は文覚に打ち解けたのだった。文覚が帰つた後、頼朝は「頼朝世ニアラハ過ニシ御恥ヲモ雪メ後生ヲモ助奉ラム」と誓う。

源平盛衰記・南都本二本間は大筋で一致するが、細部はかなり異なる。源平盛衰記によれば、二人の出会いは頼朝が「有かたき相人」と評判の文覚に自分の相を見てもらい、合わせて都の話をお聞きと思つて、文学の弟子、相照を呼んで相談する処から描かれる。南都本は、文覚の「ユ、シキ相人」という評判を記しながら、源平盛衰記のように頼朝の意向を直接それに結びつけることなく、「伊豆ノ御山巡礼ノ次」に「名越谷ノ奥」の文覚の住まいを訪ね、弟子覚文房（源平盛衰記では相照の話に出てくる）に「今ハ此カセモト、リオシミテモカヒアルマシキ事ナレハ速ニ出家入道シテ聖ノ御房ノ弟子ニナリ進セン」と伝えることになつてゐる。さて、相照（南

記では、令旨を披見した後で、頼朝の個人的な考えが示されることになっている。しかし、その考えも令旨に対する姿勢の域を出ず、せいぜい「當家の面目」という表現が見える程度である。従つて、頼朝の「年来ノ宿意」との関連は全く手懸かりがない。尤も、征夷大將軍になるといふ予言などと矛盾する箇所もないのだし、源平盛衰記「別令旨」の「以前右兵衛佐源頼朝為大將軍」といふ表現は正にその第一歩という風にも見える。

当道系本は、記事が極めて簡略で、頼朝に関しても、頼政の言葉に「伊豆ノ國ニハ流^人前ノ右兵衛佐頼朝」(平松家本)と挙げられ、令旨を伝える文章に「同五月八日伊豆ノ北条ニ下^ッ着 前ノ右兵衛佐殿ニ令旨ヲ献リ」に記されているだけである。「殿ニ」「献リ」といふ敬語に頼朝を重んじていることが窺われる外は、全く他の源氏と同じ扱いである。

右のように令旨に関する部分での、諸本の頼朝に対する扱いを見直して来たが、前節で調べた頼朝の「来年ノ宿意」との関連を直接に示すような表現は殆んど出ていなかった。では、この二つの部分は全く無関係に、延慶本、源平盛衰記に収められているかと言え、それも決め難い。その間の微妙な問題は源平盛衰記の末尾に記したのだが、延慶本、源平盛衰記に共通することで同様のものがある。それは、この二本が特に頼朝を重視している点である。前記のように、延慶本では令旨が頼朝に宛てられ、源平盛衰記では「別令旨」が用意されると区々ではあるが、以仁王、頼政によつて頼朝が特別扱いされている点は変わらない。これは、頼朝が征夷大將軍

になりたいという希望を有ち、そうなることが霊夢によつて告げられていることと矛盾しない。しかも、「来年ノ宿意」記事を欠く長門本が令旨を特に頼朝に宛てたものでもないことに照らし合わせれば、頼朝の特別扱いを霊夢への対応と見る余地も残っているように考えられるのである。

三

最後に、後白河法皇の院宣によつて頼朝が旗揚げする辺りの記事に就いて、頼朝の扱われ方を見てみることにしよう。

頼朝の旗揚げは、「右兵衛佐謀叛發事」の章段で知らされるのだが、こゝは当道系本と非当道系本ではつきり分かれる。非当道系本は東国からの早馬の口上で、旗上げの背景について「一院ノ宣并高倉宮令旨アリトテ」と言及するが^(注七)、当道系本はそうしたことに全く触れない。

次に「兵衛佐頼朝發謀叛ヲ由来事」の章段に至ると、引き続いて令旨に言及するのは延慶本だけになる。延慶本は「四五月ノ程ハ高倉宮ノ宣旨ヲ賜テモチナサレタリケルホドニ」と、令旨到着後の施行状発行を踏まえた記述である(但し、令旨の到着は五月八日)。これに対して、源平盛衰記、長門本、南都本や当道系諸本は「とし頃日ころさてこそ過つるに」(長門本)と記すだけである(この表現は延慶本にもある)。当道系本はこれでも良い(南都本は不詳)が、源平盛衰記や長門本では先の令旨を受けて施行状を出していたことが脱落してしまっている。このところ、源平盛衰記や長門本は一貫性に欠ける。又、四部合戦本は、長年無難に過ごして来たのにとしながら、「年来宿意而事」といふ表現も記している(これも延慶本にあ

宣伝していることにはなるが。施行状が出されたのは五月の何日か不明であるが、十五日には以仁王の「謀叛」が露顕してしまう。それに伴って、発せられた施行状がどうなったか、延慶本の記事は全くその消息を伝えない。

長門本は、別稿で指摘したように令旨までは延慶本に変わらない。しかし、令旨の文末に頼朝に宛てる旨の表現はなく、使者がこの令旨をどのようにして諸国の軍兵や頼朝に伝えたかの記事もない。只、頼朝の許に令旨が届き、頼朝がその主旨を諸国に伝えている処から見れば、令旨は頼朝に對して発されたものかと考えられる（とすれば、延慶本に変わらない）。頼朝の施行状は近江の国の源氏に具体的指示を与えたものとなっているが、頼朝自身の行動は北陸道から勢多に向かうとしているようで、令旨が発せられた頃の情勢では全く考えられないような内容である。このことに関係があると考えられるのが頼朝施行状の日付で、実はそれは令旨の日付五月九日から二箇月後の「七月日」という日付になっている。この日であれば、長門本では院宣の日付が七月六日になっているので、寧ろ院宣の旨を伝えたのと変わらない。頼朝の施行状に対する反応は、延慶本は何も記していないが、長門本は「これによって勇士等皆兵衛佐の下知にしたかひければそむくもの一人もなかりけり」とする。しかし、このような情態は少なくとも頼朝が安房の国に落ちて、上総介弘経、千葉介胤経を味方に付けてから後でないと現出しない。このような点を見ると、長門本の頼朝施行状のあたりは、適当に糊塗しようとして、却って馬脚を現している風であ

る。

源平盛衰記は、別稿で指摘したように「廻宣の令旨」となっている。しかし、頼朝に対しては、令旨と同日に「源家の嫡々なれば」ということで、「別令旨」が発せられている。頼朝を特に意識した風に描いているもの。先述の延慶本があるが、延慶本は令旨が頼朝に宛てられた理由を示していない。「別令旨」は、以仁王が帝位への志を抱いていること、清盛に「皇法」を滅ぼそうという悪意があることの二点に絞って、源氏の蹶起を促している。頼朝はこの状で「大将軍」を努めることを期待され、令旨に従わないものを「伐責」する根拠を得たことになる。令旨は、行家によって近江の国から次々に伝えられて行く。さて、頼朝は、令旨を読んで了承の意を伝えた後に、「當時勅勘の者に侍り 身にあて、令旨を給すは軍兵引卒其憚あり」と言い出す。すると、行家は「別令旨」を、待っていたかのごとく差し出す。「當時勅勘の者に侍り」と言うのは、特別なものが欲しいという口実なのであろうか。満足した頼朝は直ちに（「五月日」の日付けである）施行状を発する。施行状は、美濃・尾張と北陸道の源氏に具体的指示を与えるものになっている。美濃・尾張が挙げられたのは頼朝に縁があるからだろうか、天武天皇の例にならったのであろうか。施行状に対して、源平盛衰記は「國／＼源氏背者一人もなし」とする。しかし、そのような情況も所謂富士川の戦い以後であらう。源平盛衰記では、卷第二十四の「頼朝廻文」の章段で全く同じ書状を「十一月日」の日付で載せている。或いは、その時の情況が繰り上げられたのかも識れないという気がする。源平盛衰

しかし、この霊夢が、源平闘諍録や真字本『曾我物語』に明白に示されているように、頼朝の天下統一は北条氏を擯んで初めて成し遂げられたということ踏まえていることは間違いない。そのことに注目して見返せば、源平闘諍録は延慶本・源平盛衰記に比べて、北条氏の功を押し出していると言ふことが出来る。それは、前記の連歌にいたる記事もそうであるが、連歌が「頼朝父子共ニ栄へ北条可繁昌奇瑞」との取り沙汰で結ばれていることで一層明らかだろう。これもやはり源平闘諍録の東国的視^(注五)点に関わるものに違いない。

延慶本・源平盛衰記の「兵衛佐伊豆山ニ籠ル事」の章段は、「近ハ三月遠ハ三年間」という表現がある処から見れば、頼朝の院宣拝受、征夷大將軍拜命の虚構の上に成立している。^(注六)しかも、興味深いことに真字本『曾我物語』も同一轍なのである。『平家物語』の成立に関わると見られる虚構に結び付いている、この章段が纏められたのはいつの時点だったのであろうか。

二

前節において筆者は、頼朝が早くから征夷大將軍になりたいという意志を有ち、八幡大菩薩の霊夢を得ていたという逸話についての分析、考察を記した。

「早くから」と殊更に述べたのは、この逸話が高倉宮以仁王の令旨到着以前の話だからである。ところが、延慶本・源平盛衰記では先の逸話は令旨到着より後、院宣による頼朝の旗揚げの直前に配されている。一方、源平闘諍録は「巻第一上」に、又、真字本『曾我物語』は時間上正しい位置、

頼政謀叛の直前にこれを置いている。

以仁王の令旨と頼朝との関わりについては、既に別稿で筆者の調査、考察の内容を発表した。但し、そこでは木曾義仲に対照して見て行くという要素が強く働いていたので、頼朝個人の扱われ方は、それ程明確に纏められていなかったかもしれない。そこで本節では、前稿に記したことを頼朝に絞って簡略に纏め、且つ配列のことも視野に入れて、考えを補うべき所は補って置きたいと思う。

延慶本では、「頼政入道宮ニ謀叛申勸事付令旨事」の章段に於て、以仁王に「謀叛」勸める源頼政の口から、悦んで「謀叛」に駆け着けるに違いない諸国の源氏の一人として「兵衛佐頼朝」が挙げられる。この時点では別稿で述べたように、他の源氏と全く同じ扱い方である。ところが、勧めに同意した以仁王の令旨に至ると、事情が異なる。令旨は文末に及んで、「謹上 前右兵衛佐殿」と頼朝一人を浮き上がらせるのである。これは、多くの源氏に宛てられた令旨の一人として頼朝へのものが取りあげられたとも見難い。というのは、令旨の使者も源行家が一人のようで、その行家は「令旨ヲ持テ頼朝カ下ヘ下レ」と命令されているからである。そして、頼朝は令旨を受けて、諸国の源氏に施行状を發している。施行状によれば、頼朝は特に北陸道の源氏に具体的指示を与えているので、自身東山、東海の源氏を召し連れて上洛する積もりのようである。但し、この状は極めて事務的で、頼朝の個人的な考えなどは全く記されていない。尤も、これで頼朝が以仁王から諸国の源氏を召し連れる棟梁の地位を与えられたことを広く

は多くの僧兵を擁しているので、手出しは出来なかった。但し、延慶本・源平盛衰記によれば、時政は心中では頼朝の「心ノ勢ヒ」に惚れ込み、頼朝も心内では時政を頼りにし、互に「相背ク心」はなかったと付け加える。源平闘諍録でも後述のように、時政は娘を勘当するが、やがて二人の仲を許し、二人を館に呼び戻したとする。

「伊豆御山」での生活を始めた頼朝の許に懐嶋景能も駆け付けて来た。

或る夜、盛長は不思議な夢を見る。それによると、頼朝が足柄の矢倉嶽に腰をおろして、左の足は「外ノ濱」（源平闘諍録では「東国」「奥州」と概括的）、右の足は「鬼海カ嶋」（源平闘諍録では夢解きに「貴賀嶋」というのが出る）にと跨がっていた。左右の脇から日と月が出ている（源平闘諍録では袖で懐くとなっている）。そして、頼朝は盛長達の酌を受け、金の盃で三度酒を飲んだというのである（源平闘諍録にはこの他、三人の子供を儲けることの子兆といったものもある）。すると、景能がこの夢を解いて、「最上吉夢也 征夷將軍トシテ天下ヲ治メ給ヘシ」「近ハ三月遠ハ三年間ニ酔ノ御心サメテ此夢ノ告一トシテ相違フ事不可有」と述べる（源平闘諍録では多くのことが述べられているが、延慶本・源平盛衰記の右の二点では、前者、征夷大將軍に至ることだけしかない）。源平闘諍録は、この後に、時政が娘の勘当を解き、頼朝と娘との間にやがて女の子が生まれる。そして、頼朝・時政が連歌して祝ったことが続けられている。

猶、真名本『曾我物語』では、「伊豆御山」へ逃げ込んで安全が認められた処で、頼朝が八幡大菩薩に「頼朝思宿願遠三年近三月内令玉へ成就セ」

と祈念した旨が記されている（『平家物語』三本にはこのような設定はない。

「遠三年近三月内」の表現は後述の夢解きの場面に再出するが、延慶本・源平盛衰記に一致）。盛長が霊夢を見た時を『曾我物語』は治承二（一一七八）年十一月以後のこととしている。夢の内容は源平闘諍録にかなり近い。但し、白鳩二羽が飛来して頼朝の髪に三つの子供を生むという夢は、盛長と同時に頼朝も見たことになっている。又、『曾我物語』は同じ時、外に妻政子にも霊夢があったことを記すのである。

この霊夢の逸話は、頼朝の「年来ノ宿意」の完成という位置を与えられているようだ。延慶本・源平盛衰記では、この逸話は頼朝が助親の手を逃れる途中、心中で祈願したことに明白に対応している。従って、八幡大菩薩が頼朝の祈願の内第一、征夷大將軍に至ることを約束し、告げたということになる。又、延慶本・源平盛衰記では、右に見て来たように、「心ニ深く思キサス事」という表現で描かれ出した頼朝の「宿意」が征夷大將軍に具体化されるまで、整然と（逸話が）積み重ねられていた。

これに対し、源平闘諍録では、この霊夢で初めて征夷大將軍という言葉が出て来る。尤も先述のように、明白ではないが、源平闘諍録にも延慶本・源平盛衰記の場合のような頼朝の祈願との対応は認められた。しかし、延慶本・源平盛衰記のように次第に一つの言葉「征夷ノ將軍」に結晶して行くといった構成はない。「欲打父敵清盛ヲ」と「征夷將軍」の二つに分かれている印象の強い源平闘諍録のこの章段が、流れを整えられる以前の姿を示すのか、「巻第一上」に配されたことによるのかは、俄に判じ難い。

朝家ヲ護リ神祇ヲ崇メ奉ヘシ 其運不ハ至ラ坂東八ヶ國ノ押領使ト成ヘシ 其レ猶不可叶者伊豆一國カ主トシテ助親法師ヲ召取テ其怨ヲ報ヒ侍ラム 何モ宿運拙シテ神恩ニ不可預ル者本地弥陀ニテ坐ス速カニ命ヲメシテ後世ヲ助給ヘ

と祈請したと言う。これも延慶本・源平盛衰記は同文だが、源平盛衰記には「其運不ハ至ラ坂東八ヶ國ノ押領使ト成ヘシ」の一文が脱落している。

一方、源平鬪諍録は、

南無婦命頂礼八幡三所 可聞食頼朝之先祖伊与守頼義朝臣迫シ奥州ノ貞任ヲ之時 以テ嫡男義家ヲ為八幡大菩薩ノ氏子ト其名ヲ号八幡大郎ト依此大菩薩至マテ氏子ニ有可ト護云御誓 然ニ頼朝者是自八幡殿四代ノ氏子也 可然者八幡大菩薩日本国ヲ頼朝ニ令打随給ヘ 欲ト打取頼朝之子敵伊東入道

と「二所權現」に精誠したことになる（道中の祈請とは特に書かれていない）。

延慶本・源平盛衰記については、既に拙稿「源頼朝と八幡大菩薩」^(注四)で延慶本に即して関係記事を列挙してある。その拙稿で、この記事以前の、頼朝と八幡大菩薩が関わる章段、「南都大衆撰政殿ノ御使追帰事」「雅頼卿ノ侍夢見ル事」を見ると、頼朝が八幡大菩薩から「金ノ甲」「節刀ト云御剣」を賜わる内容となっている（この二話は何らかの関係があるのかもしれない）。ここには、その延長線上ということと、「征夷ノ將軍」という言葉がすらすらと出てくるのに違いない。伊豆一国の場合は「怨ヲ報」ということ

だが、それが、坂東八箇国、天下の將軍と地位が高まるにつれ、個人的な「怨」が超えられている処も興味深い。この逸話に来て初めて、「心ニ深く思キサス事」「大事」は「征夷ノ將軍ニ至」ることであったことが分かるのである。

一方、源平鬪諍録ではこの一連の記事は「卷第一上」に配されている。それで「征夷ノ將軍」の文字が出て来にくいのだろう。しかし、日本国を打ち従えるというのは、「征夷ノ將軍」に外なるまい。それにつけても、日本国を打ち従えるということと「子敵伊東入道」を討つということが唯並列されているのは稚拙である（源平盛衰記と何らかの関係があるのだろうか）。又、そのような頼朝の祈願の内容よりも、彼と八幡大菩薩の結び付きを訴える部分が長いのも幼く見える。

猶、真字本『曾我物語』には、東国が難しい場合は伊豆一国をもらって、子供の敵、伊東入道を討ちたいという旨が記されていて、この点は延慶本・源平盛衰記に近いところがあるとも言える。しかし、一方では源平鬪諍録に通じる八幡大菩薩の「御誓」とか、頼朝が義家から四代である旨の表現なども認められて、結局、いずれとも決しがたい。

その後、頼朝は北条時政を頼っていたが、時政の娘との間に又似たような事件が起こってしまう（源平鬪諍録は例によって同年十一月下旬のところとする）。しかし、今回、頼朝から引き離され、山木兼隆へ嫁がせられた娘は家出して「伊豆御山」へ逃げ込んでしまう。そして、頼朝もそこへ駆けつけてしまったのである。時政・兼隆は二人の行動に憤ったが、「伊豆御山」

描いている。従つて、三女を打ち靡かし、千鶴を得た頼朝の喜びは大きかったに違いない。千鶴の誕生にあたって、彼は、この子が十五歳になったら、伊東・北条を始めとして関東の軍勢を率いて京に上り、「欲打父敵清盛ヲ」と述べ、密かに「二所権現三嶋明神御宝殿」に願書を納める。このように源平鬪諍録では、初めて頼朝の「年来ノ宿意」を描く所から既に「欲打父敵清盛ヲ」と明白な内容（表現）になっているのである。

猶、源平鬪諍録は右の経緯を仁安元（一一六六）年三月から翌年にかけての時期としているようである（延慶本・源平盛衰記は特定しない）。又、真字本『曾我物語』に、源平鬪諍録の頼朝が千鶴の成人を期して述べた言葉に殆んど一致するものが見られるが、「馳上テ都ニ欲打父敵清盛ヲ」という明白な表現はない。

大番役が終わつて助親が帰国した時（源平鬪諍録は嘉応元（一一六九）年七月とする）、千鶴は三歳になっていた。しかし、頼朝を聳にしたと平家に聞かれるのを恐れた助親は、雑色等に命じて、千鶴を「伊豆ノ松河ノ奥シラ瀧ノ底ニフシツケニ」してしまふ。そして、三女を江間小次郎の許に嫁がせる。源平鬪諍録は、父母がいると聞いて喜んで滝に入ろうとする千鶴の涙を誘う場面、千鶴を殺された三女が悲嘆に暮れ、助親の命に背いて江間小次郎の許を逃れ、「縁者」の許へ身を寄せたことを記している（延慶本・源平盛衰記にはない）。源平鬪諍録は三女母子に同情的で、好意的な描き方をしていると言えよう。

このように可愛がつていた千鶴を殺され、妻を奪われた頼朝は、「千度百

度」助親を討とうと思うが、「大事ヲ心ニカケナカラ其ノ事ヲ不遂シテ今私ノ怨ヲ報ハムトテ身ヲ亡シ命ヲ失ハム事愚カ也。有大怨忘小怨ト思ナタメ」て、遣り過ごそうとする。源平鬪諍録は、このことを聞いて助親を討とうと憤る足立盛長、佐々木定綱（彼等は頼朝配流の当初から頼朝に心を寄せて、その側近に仕えていたように描かれている）と頼朝との遣り取りや、引き離されることになった三女と頼朝の悲嘆の情を王昭君や玄宗皇帝に例えて描くなど全体的に延慶本・源平盛衰記より詳しいが、頼朝の自制の部分は延慶本・源平盛衰記と変わらない（かなり近い）。

このように、延慶本・源平盛衰記では、先に「心ニ深く思キサス事」と表現されていたことがこの箇所に至つて、「大事」「大怨」と呼ばれ、妻子を奪われたことよりも重いものとして位置付けられるのである。源平鬪諍録は「欲フ討ト父敵清盛ヲ志シ」と、前と同じ表現である。

猶、源平鬪諍録は先述のように、ここでこの「志シ」が「自被流罪當国」「日夜朝暮ニ不晴遣」情態であつたことを明かしている。又、真字本『曾我物語』は、三女と頼朝の悲嘆に準える例など源平鬪諍録に通じるものが認められるが、頼朝の「年来ノ宿意」を示す自制の言葉などはない。

助親の非情な仕打ちをぐつと頼朝は堪えたのであるが、助親は更に追い撃ちをかけようとする。しかし、それは息子の九郎助兼が頼朝に知らせるところとなり、頼朝は擬装の為、盛長等を屋敷に残し、単騎脱出して、危く虎口を逃れる。その間、頼朝は、

南无帰命頂礼八幡大菩薩 義家朝臣カ由緒ヲ不被捨者征夷ノ將軍ニ至テ

源頼朝の旗揚げをめぐる

橋口晋作

筆者は別稿「義仲と頼朝——『平家物語』での地位、序列を中心に——」^(注一)において、木曾義仲と源頼朝の扱われ方(地位、序列)に焦点を絞って、『平家物語』の主要な諸本の関連記事を検討してみた。その結果、『平家物語』は、一貫して頼朝を常に対平家勢力の中心であった様に描いていることが明らかになった。これは勿論予測されたものであったが、筆者がその中で興味を抱いたのは、頼朝の平家追討の院宣拝受と征夷大將軍拜命の操り上げが一連のもので、対義仲との関係から虚構されたと見るべきものではないか^(注二)ということである。

さて、以上のような頼朝の権威付けは、そもそも初登場、旗揚げの時点に於いてはどうだったのであろうか。別稿では既に高倉宮以仁王の令旨の場合が取り上げられているのであるが、二人を比べることが中心であったために、頼朝個人の全体的な描かれ方という面からは落とされたことも多かった。そこで、本稿では、先学の指摘も少くないところだが、頼朝の旗揚げ前後について、彼の描かれ方を(権威付けを窺いながら)、延慶本を中心に特徴的な諸本にわたって、見て行くことにしたい。

まず最初に、頼朝個人の「年来ノ宿意」^(注三)(適当な表現とも言い難いが)から見ていくことにする。既に指摘されている様に、これは頼朝の旗揚げ以前の逸話(「兵衛佐伊豆山ニ籠ル事」)の中で描かれるので、『平家物語』諸本の中では延慶本・源平盛衰記・源平闘諍録にしかない。

延慶本・源平盛衰記によると、伊豆の国に流された頼朝は「心ニ深く思キサス事有テ世ノアリサマヲ伺ヒテ」いたとのことである。それは、近国の武士達が「當時平家ノ恩顧ノ者」を除いて、昔の好みを忘れず、頼朝へ、いざという時の忠誠を誓っていたからである。

延慶本・源平盛衰記はこの「思キサス事」を手始めに後述のように漸層的に頼朝の「年来ノ宿意」を具体化して行く。これに対して、右の部分を欠く源平闘諍録は、後述の記事の頼朝の言葉に「自被流罪當国以来」というのがあり、延慶本・源平盛衰記に近く配流当初からのことであるが、内容上二つの部分にわかれ、表現も直線的で漸層性は認められない。

源平闘諍録で頼朝の「年来ノ宿意」が初めて描かれるのは、彼が伊東祐親の三女に通じて、千鶴を儲けた時である。延慶本・源平盛衰記にも千鶴を儲けた逸話が記されているが、この間は事柄を淡々と記すだけで、そのような表現(「年来ノ宿意」)はない。源平闘諍録は「縁友」を欲して、伊東の三女を口説こうとする頼朝の腐心、尽力振りを、業平が二条の后を手に入れる辛苦、「百夜ノ榻端牆生ル千束錦木」といった故事を引いたりして